

論文審査の結果の要旨

報告番号	乙第1218号	氏名	新田憲市
論文審査担当者	主査 桑原 宏一郎 副査 山田 充彦・川真田 樹人		
<p>(論文審査の結果の要旨)</p> <p>急性大動脈解離は、突如発症し致死的状态になる大動脈疾患で早期診断が予後を改善するとされている。D-dimerは、急性大動脈解離の診断に使用され、感度は高いが特異度は低いとされている。これまでの報告では、D-dimer陰性の急性大動脈解離症例では、解離の範囲が短いとされてきた。しかし、急性大動脈解離と診断されたD-dimer陰性の患者の臨床的特徴や予後に関しては明らかではない。本研究は、急性大動脈解離診断時のD-dimer陰性の患者の臨床的特徴を明らかにするために、当院に入院した急性大動脈解離患者を対象にD-dimer陰性群とD-dimer陽性群とに分け発症時の症状・所見、CT・超音波画像評価、血液生化学検査や手術の有無を調査し後方視的に比較検討した。</p> <p>その結果、以下の結果を得た。</p> <ol style="list-style-type: none">急性大動脈解離症例の7.1% (9/126) がD-dimer 陰性であった。D-dimer 陰性群は、D-dimer 陽性群と比較し有意に解離の範囲が短く (p=0.008)、血小板数が高値であった (p=0.0005)。多変量解析の結果、D-dimer 陰性と関連が認められたのは、血小板数(odds ratio, 1.31(1.09-1.58), p=0.003) と Extension score (odds ratio, 0.56(0.33-0.96), p=0.03)であった。D-dimer 陰性例の4症例(44%)がStanford A型解離であった。D-dimer 陰性で緊急手術となった例は3症例であった。さらに、緊急手術となった例はすべてStanford A型解離で部分閉塞型かつ心タンポナーデであった。 <p>これらの結果より、血小板数が高いことや解離腔が短いことはD-dimer 陰性と関連する因子であること、解離腔がたとえ短い場合でもD-dimer 陰性例のなかに緊急手術を要する症例が存在し、D-dimer 陰性のみだけでは、致死的な急性大動脈解離例を除外することはできないことが示せた。よって主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。</p>			